

 1回(昭2年卒)～23回(昭24年卒) 卒業生 2,835名
 1回(明43年卒)～39回(昭24年卒) 卒業生 3,327名
 1回(昭23年卒)～60回(平20年卒) 卒業生 27,242名



京都府立
 西舞鶴高等学校
 創立100周年記念
特集号

双鶴同窓会報
 発行 〒624-0841
 京都府舞鶴市引土145
 京都府立西舞鶴高等学校
 双鶴同窓会
 ☎(0773)75-3131
 編集 松田 潔
 責任者 田中 實
 印刷 オガワ印刷

輝かしい歴史と伝統を重ねて、一世紀

京都府立西舞鶴高等学校 創立100周年記念式典
 平成19年10月13日(土)



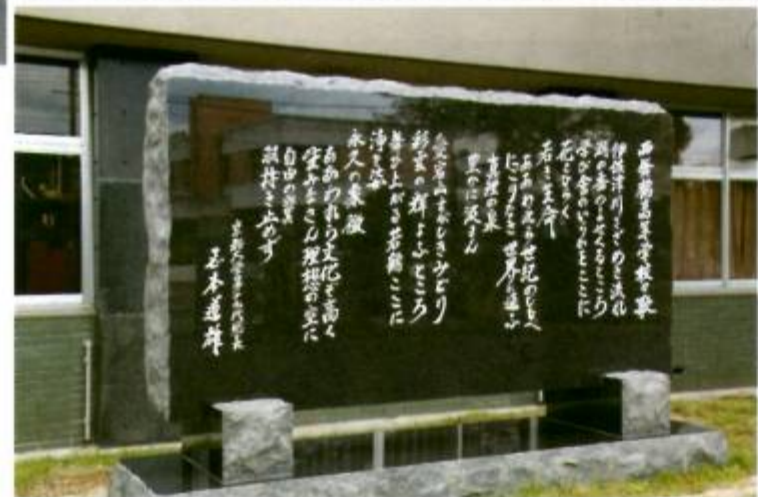
双鶴同窓会
創立百周年記念事業

西舞鶴高等学校校歌碑建立

平成一九年一〇月一三日

京都府北部の教育の中心として、
 数々の実績を築いてきました西舞鶴高
 等学校は、創立百周年を迎え記念の
 式典を挙行されました。

双鶴同窓会は、後世に伝えるものと
 して、京都大学第一九代総長、岡本道
 雄先生の揮毫による「校歌碑」を建立
 しましたが、校訓碑「究理 尚志
 敬人」と並んでいる姿に生徒諸君が母
 校に誇りを持ち、勉学に、心身の鍛練
 に励むことを願っています。



正面玄関横に建立された校歌碑



故 多田卓夫先生揮毫の校訓碑

創立百周年記念式典

式辞



校長 北野 茂

日増しに秋の深まりを感じる今日この良き日に、京都府知事代理猿渡知之副知事様、京都府教育委員会教育長 田原博明様、舞鶴市長代理 浅井孝司副市長様、元京都大学総長岡本道雄様をはじめ、多数の御来賓並びに同窓会関係者の皆様方の御臨席を賜り、京都府立西舞鶴高等学校創立百周年の記念式典をかくも盛大に挙行できますことは、本校にとりましてこの上ない光栄であり、教職員・生徒とともに感謝申し上げます。高段からではございますが、衷心より厚くお礼申し上げます。

さて、本校は明治四〇年四月、「京都府加佐郡立高等女学校」として現在の城北中学校の地に開校されました。当時としてはまれな、時代に先駆け「良妻賢母」育成の女子教育が行われていたと伝えられております。その後、加佐郡の地にも中学校をという地元の切なる願いから、大正一一年には男子校であります「京都府立舞鶴中学校」が、現在の本校の地に開校いたしました。そして時代とともに幾多の変遷を経て、昭和二三年一〇月の高等学校再編成により、この両校が統合され、「京都府立西舞鶴高等学校」と改称し、後に全日制となる通常制と定時制並びに通信教育の課程が設けられました。そしてこの西舞鶴高校の全日制・定時制・通信制の教育はこの後、約五〇年間続くこととなりますが、平成一一年三月に定時制は閉制となり、全日制・通信制課程を併置する現在へと至っております。

この間一世紀、明治・大正・昭和・平成の星霜の歩みは、まさに激動の時代の歩みでありました。中でも先の太平洋戦争では、二八七名にも上る戦没者の方々の名前が記されております。その中には、本校を象徴する同窓生であります、棒高跳びの大江季雄選手が、昭和一六年フィリピンのルソン島にて、二七歳の若さで戦死されたと記録されております。このように本校百年の歴史には、

困難な時代にあっても、その時代をひたむきに生きた若い人たちの熱い思いが塗り込められております。そして、幾多の困難や曲折に遭遇しながらも、地域と一体になって校運の隆盛に努めてこられました、同窓生、PTA教職員の皆様の懸命の努力がありました。本校が今日あるのは、このような先賢の英知、また、この地域の繁栄を願ってやまなかった人々の、熱意と努力のたまものであります。本校は、一貫して府北部の教育の中核として、三万二千五百名を超える卒業生を輩出し、数多くの俊秀を世に送り出してまいりました。現在も各界で多くの方が華々しい活躍をされており、本校が府北部の中核校として今日まで果たしてきた役割は、誠に多大なものであったと、改めて実感している次第であります。学校創立百周年にあたり、これら関係者の皆様方に対し、深く敬意を表したいと存じます。

さて、生徒の皆さん、皆さんは今まさに、西舞鶴高校の記念すべき歴史的瞬間に学んでおります。この歴史的な瞬間に、立ち会うことができたいという幸せと責任を自覚し、本校の伝統の良き継承者として、この感動を深く心に刻み、これからもたくましく主体的に生きてほしいと願います。そして先輩たちから脈々と受け継がれてきた、本校の歴史と伝統の重みをしっかりと受け止め、西舞鶴高校の生徒であること、また、同窓生の一員となる事に誇りと責任を持ち、校訓にある「究理 尚志 敬人」の精神をしっかりと噛みしめ、確かな未来を切り開いてほしいを思います。特に商業科三年生の皆さんには、伝統ある本校商業科の最後の卒業生となることを誇りとして、これからも胸をはって活躍されんことを願っております。

このたびの百周年の記念事業では、皆様方の暖かい、並々ならぬ御理解と御支援をいただきました。皆様方の母校に対する思いには、改めて心打たれるものがございました。この御厚情を胸に、さらなる百年に向けて有為な人材を送り出すことができよう、教職員一同、今後とも一層の努力をしていく所存であります。

歴史や伝統は単なる遺産ではなく、「明日への新たな発展」を目指すものだとして承知しております。今、改めて開校以来の伝統とその精神を顧み、未来に思いを馳せるとき、新たな勇氣を持って、高い理想を追求していきたいと考えております。創立百周年という大きな節目にあたり、教職員・生徒ともども、本校の一層の充実・発展のために、全力を傾注していく決意を、新たにしているところであります。

結びにあたり、歴代校長先生をはじめ、先輩旧教職員の皆様方の多大なる御功績に対し、深甚なる敬意を表しますとともに、府・市・同窓会・PTAなど、本校関係の方々から寄せられました御厚情に、深く感謝申

し上げる次第であります。そして、今後とも、本校に対しまして、一層の御指導・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。式辞

北野校長 式辞



◀式典会場 三年生と二・一年生代表



◀北野校長 式辞

ご挨拶



双鶴同窓会

会長 金村 九二夫

本校西舞鶴高校がその前身加佐郡立女学校から数えて今年の四月で百年を迎えました。本日御来賓をはじめ関係者御参集いただきまして、お祝いができますことを当校の卒業生の一員として心から喜んでおります。

加佐郡立舞鶴女学校が一九〇七年、明治四〇年に創設され、更に一九三六年、大正一一年、二九年後に創設された府立舞鶴中学校とあわせ、一九四八年昭和二十三年にこの旧制の中学と女学校の両校が学制改革により京都府立西舞鶴高等学校となり今日に至りました。

私は当時舞鶴中学校に終戦年敗戦色濃い昭和二〇年に入学し、旧制の四年生になるところで、二校統合の新制西舞鶴高校の一年生となりました。通算六年間の長きにわたり、新旧双方の教育を受け、登校に青春を過ごし、お世話になったことになりましたので、改めて深い感慨を持ちます。

舞鶴女学校からの百年の、又新制高校からの六〇年の歴史を改めて振り返りますとそれ以前は中等教育を受けようとする、当地では交通の

不便な時代、京都や宮津の学校の寄宿舎へ入って勉学をせざるを得ませんでした。それから多くの立派な先輩を輩出しましたがこの旧制の両校の多くの先輩方を若くしての戦死や過酷な苦難の人生をおくられたことを身近の人たちを通して思い出されます。又戦後になってからも、急速に改革されたため、数え切れない話題が思い出されます。統合から既に六十年、戦後の新制の西舞鶴高校の方がより長い歳月が経ち、地域の大数の若者の勉学の機会を与えられることになりました。旧制の最後の卒業生の一番若い先輩の方々でも喜寿を迎えられるようになりました。

として当校舞中一九回卒業の四方重衛先生作詞といわれておりますが、高校三回卒の私は知らずに卒業しました。もっとも当時の国語科の先生方の合作で四方先生が代表で作詞者になられたという説もありますが、もう六〇年も前のお話で定かではありません。ちなみに作曲は音楽の舞女先輩で当校の音楽の教師でありました田中光子先生のお骨折りで、東京音楽大学の多くの新制高校の校歌を作曲された下総皖一（しもふさかんいち）先生にお願いされたと聞いております。



◀金村同窓会長

就かれてきました。校歌揮毫者として最適な方と考えます。本日も御高齢にも関わりませず京都から態々御出席いただきました。この校歌の碑が長く後輩の皆さんにとって伝統と青春の情熱を奮い立たす有意義なものでありますことを願っています。これから卒業してくる後輩たちに、青春の三年間机を並べ、ともに部活動に汗を流した同窓生が貴重な人と人との繋がりになりますよう、同窓会が手助けと付き合いの場を創れたらと思う次第であります。この百年の節目を契機に良き伝統を維持するのも同窓会の大きな使命ですが、特に無形のものには風化しないうちに、次の世代に伝えたいものです。百年の歴史の上に、当地の多くの若者に基礎の知識を土台とする中等教育が根を生やしおおむね達成されたと思えますが、これからは更に、この地の視野の狭い考えから脱却し、いずこにいてもどんな職業についても幅広い視野で、大きな心で、世界の様々な異文化を理解し、自立心と多様な考え方を受け入れる、歴史観と人間関係が持てる人材になっていただきたいと切に願います。



◀百周年式典 壇上のご来賓



◀百周年式典会場

今回の歌碑を揮毫していただきましたのは、当校の大先輩、舞中五回卒業の岡本道雄先生にお願い致し、本日除幕式を行うことができました。御承知のように、岡本先生は京都大学第一九代総長をされ、その上臨時教育審議会会長として戦後日本の教育の方向を定める、重要な要職に

後になりましたが、本記念碑を建てるにあたりまして、京都府の知事様をはじめ、関係の方々、又北野校長を始め当校の先生方に大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。次第であります。ありがとうございました。

祝 辞



京都府知事 山田 啓 二

京都府立西舞鶴高等学校が創立百周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

本校は、時代が大きく変化する中で、それぞれの時代が求める有為な人材を多く世に送り出され、地元の人材を多く世に送り出され、地元の京都府北部はもとより、我が国の政財界をはじめ、各界において御活躍

いただいておりますことは、本校の優れた教育活動の賜物であり、長年にわたり、府民の厚い信頼を得ながら教育活動を実践してこられました

歴代の校長先生をはじめ教職員の皆様の御芳苦に対しまして、心から感謝申し上げますとともに、PTAや同窓会など関係者の皆様の御理解と御協力にも改めて感謝申し上げます。

今日まで、西舞鶴高校は、質実剛健・文武両道の教育方針の下で、揺るぎない歴史と伝統を築いてこられました。一人一人の希望に応じた丁寧な指導は言うまでもなく、大学や企業と連携した特色ある取組や、府立高校で唯一日本陸連公認のトラックを有するグラウンドを活用した部活動の活躍など、勉学と部活動の両立を立派に実践されています。さらには、ボランティア活動にも大変熱心に取り組まれ、去る七月の「新潟

中越沖地震」におきましても、いち早く支援のためのフリーマーケットを催すなど、まさに、知徳体の調和のとれた人材の育成に努めておられ、教育に対する関心が高い今、大変心強く感じております。

二一世紀に入り、我が国はさまざまな分野において転換期を迎えております。行政の在り方としましては、地方分権の考え方が進んでおり、各地で「地域力」が問われているところ

です。地域の人が豊かで活力ある暮らしをするために、経済の発展はもちろんです。が、「地域力」を支える核となるのは、何よりも「教育」

であります。「郷土(くに)づくりは人づくり」であり、地域の歴史や伝統文化を継承し、地域全体に活力を与えるためにも、熱意あふれる人材の育成が極めて重要であり、京都府といたしまして、「京都府地域力再生プロジェクト」により一層の地域支援を進めていきたいと考えて

おります。

本校が位置しますここ舞鶴は、日本海の玄関口として、経済的にも極めて重要な役割を担っており、舞鶴をはじめとする府北部の隆盛が京都府全体の発展のためには不可欠であ

ります。そのためにも、府北部の中核校である西舞鶴高校の教育に対する期待にはますます大きなものがあり、学校と地域が一体となった「社会総出の教育」を一層推進していただきますようお願いいたします。

結びに当たりまして、京都府立西舞鶴高等学校のますますの御発展と、関係の皆様御健勝、御活躍をお祈りいたします。お祝いの言葉といたします。

代読 猿渡副知事



熱心に聞き入る式典会場



祝 辞



京都府教育委員会 教育長 田原 博 明

本日ここに、多数の御来賓の方々の御臨席の下、京都府立西舞鶴高等学校の創立百周年記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

本校は、明治四〇年の創立以来、城下町の風情を今に伝えるこの地の豊かな風土に抱かれ、質の高い文武両道の教育を進めてこられました。

この間、多くの卒業生が、国内外のさまざまな分野で広く活躍されており、深く敬意を表する次第です。また、このような輝かしい本校の発展を支えてこられました歴代の校長先生をはじめとする教職員の皆様、PTA、同窓会並びに地域の皆様の御尽力・御支援に対しまして、改めて心から感謝申し上げます。

さて、本校の百年の歩みにおきましては、府北部の伝統校として、府立高校を力強く牽引する豊かな教育を実践してこられました。「西高進路セミナー」として定着している高

大連携事業や、民間研究施設と連携した教育など、学びの意欲を喚起する特色ある取組を次々に進めてこられました。部活動におきましても、伝統的に強豪としての名をとどろかせた野球部やバレーボール部をはじめ

め多くの部が活躍しております。また、北部地域唯一の通信制課程を置く学校として、生徒の多様なニーズに応じた高校教育の推進に大切な役割を果たしてこられました。

二一世紀に入り、情報化、国際化など社会の変化は一層激しいものとなっております。学校教育におきましても、時代の変化を的確に察知し、柔軟な発想で対応できる能力の育成が求められており、府教育委員会といたしまして、「京の子ども、夢・未来」プラン21に基づき、時代の進展等に対応した教育改革を進めているところであります。本校におきましても、平成一八年度に「理数探究科」を設置するなど、社会の要請に応える人材育成に取り組んで

いただいております。府北部の中核校として、西舞鶴高校に寄せられる期待は、今後ますます高まっていくものと確信しております。

ところで、生徒のみならず、本年は「友情のメダル」として世界の人々を感動させた本校卒業生大江季雄選手が、その後二一年の間破られなかった、棒高跳びの日本新記録を樹立してちょうど七〇年になります。毎日みなさんを温かく見守る大江選



祝辞 田原教育長

手の銅像は、「努力と友情の人たらん」との願いを込めて建立されたと聞いておりますが、今日ほど、一人一人の若者の心を鍛えることが期待されている時代はありません。激動する社会において、自らが主体的に行動する力とともに、他人を思いやる心が一層重要になってまいります。この歴史と伝統に抱かれた本校で学問を究め、人間性を磨き、校歌に謳われる「舞い上がる若鶴」のごとく、世界に羽ばたいていただきますことを願ってやみません。



舞鶴市長 齋藤 彰

祝 辞

本日ここに、京都府立西舞鶴高等学校創立首周年記念式典が盛大に挙行されるにあたり、舞鶴市民を代表して、お祝いの言葉を申し上げます。誠に光栄に存じております。まずもって、創立百周年誠におめでとうございます。心からのお祝いを申し上げます。顧みますと本校は、我が国が近代化の歩みを一層加速させつつあった明治四〇年に、加佐郡立高等女学校として創立されました。その後、大正一一年に開校された京都府立舞鶴中学校と統合され、昭和二三年の学制改革に伴い、現在の京都府立西舞鶴高等学校となられたところであります。

そして今日までの一世紀の間、日まぐるしく移り変わる世相の中で、それぞれの時代の要請に応えながら、年毎に施設や教育内容の充実を図られ、地域の高校教育を支える柱として、今日に見る確固たる基盤を築いてこられましたことは誠に同慶に堪えないところであります。この間における、歴代校長先生をはじめとする教職員の皆様、さらには関係者の皆様のご労苦と教育にかけられてきた並々ならぬご熱意に對

しまして、心からの敬意を表する次第であります。今日、私たちを取り巻く環境は、少子高齢の本格的な人口減少社会を目前にし、成長から成熟へと、時代の大きな変革期を埋えようとしており、経済、国際情勢、自然環境などあらゆる面で、非常に不透明で不確実な状況にあるものと存じております。

このような中、資源に恵まれない我が国が、社会における活力を維持しながら、真に豊かな国家としてさらに発展していくためには、知的創造力を最大の資源と捉え、優れた人材を育成していくことが、何よりも肝要であると存じております。

その意味からも、創立以来、築き上げてこられた輝かしい伝統のもと、三万二千余名にも及ぶ数多くの有為な人材を輩出してこられた貴校への期待は極めて大きく、その果たされる役割は、今後益々重要になるものと存じております。本日の慶典において、輝かしい百年の星霜を回顧される時、関係者の皆様のご胸中は感慨無量のものであらうと拝察いたします。どうか、貴校におかれましては、

百周年の大きな節目を新たな飛躍へのステップとして、校訓である「究理・尚志・敬人」の下、教職員や在校生の皆さん、さらには、関係者の皆さんが一体となった取り組みにより、貴校の新たな輝かしい歴史を刻んでいっていただきますよう願って止みません。



代読 浅井副市長



式典会場

本日の記念式典に臨み、京都府立西舞鶴高等学校の限りなくご発展と、関係者の皆様のご健勝と一層のご活躍をご祈念申し上げます。お祝いのごあいさつといたします。



京都府立西舞鶴高等学校 生徒会長 渡辺 充輝

よろこびの言葉

本日、西舞鶴高等学校創立百周年記念式典に、卒業生の方々と共に、在校生として参列できたことを大変嬉しく思います。百年という節目を迎えることができましたのも、卒業生の方々が築いてくださった数々の歴史や日々の努力のおかげです。卒業生お一人お一人

人の思いを受け、新たな西舞鶴高校へつなげていくのだと私たち在校生は思いを新たにしています。私たちの学校生活は、朝、校門を入るところから始まります。校門を入ると「究理、尚志、敬人」という我が校の校訓を刻んだ碑があります。「道理をきわめる、志をたかくする、



▲喜び溢れる会場
西高プラスバンド伴奏 国歌、校歌斉唱

卒業生の方々が築いてこられた歴史に続くように、私たちも勉強やスポーツだけではなく、人として大きく成長できるように頑張っていきたいと思えます。

百周年を迎えるにあたって、わたしたちの中にも規範意識が芽生え、意識定着に向けて芽を育てつつあります。紆余曲折しながらも、自らを律し、新しい歴史を築いていこうとする萌芽が、私たちの中にはあります。

人を敬う」という意味です。私たちは毎日その校訓を目にしながら、学舎に集い、自他共に高めあおうと、日々を送っています。
この学校生活の中で私たちが強く感じることは、卒業生の方々の母校に対する熱い思いです。学校行事や部活動など様々な形で御支援をいただいたり、時には厳しいお言葉をいただいたりしています。これも、母校を大切に思い、後輩である私たちに期待してくださっているが故のこととありがたく、また、力強く思っています。

京都府立西舞鶴高等学校

100周年記念式典

創立100周年記念式典

1. 日時 平成19年10月13日(土)
午前11時30分
2. 場所 舞鶴市民会館大ホール
3. 式次第

| | | | | | | | | | |
|--------|----|----|---|---|---|---|---|---|---|
| (1) 開 | | | | | | | | | 式 |
| (2) 国 | 歌 | 齊 | 齊 | 唱 | 唱 | 辞 | つ | つ | 辞 |
| (3) 校 | 歌 | 齊 | 齊 | 唱 | 唱 | つ | つ | つ | つ |
| (4) 式 | | | | | | | | | |
| (5) あ | い | さ | 祝 | 祝 | 祝 | 祝 | 祝 | 祝 | 祝 |
| (6) 来 | 賓 | 祝 | 祝 | 祝 | 祝 | 祝 | 祝 | 祝 | 祝 |
| | ・京 | 都 | 府 | 知 | 事 | | | | |
| | ・京 | 都 | 府 | 教 | 育 | 委 | 員 | 会 | 教 |
| | ・舞 | 鶴 | 市 | 長 | 介 | | | | |
| (7) 来 | 賓 | 紹 | 紹 | 介 | 露 | | | | |
| (8) 祝 | 辞 | ・祝 | 電 | 披 | 露 | | | | |
| (9) 寄 | 附 | 目 | 録 | 贈 | 呈 | | | | |
| (10) 感 | 謝 | 状 | 贈 | 呈 | 呈 | | | | |
| (11) よ | ろ | こ | び | の | 言 | | | | |
| (12) 閉 | | | | | | | | | |



◀式典会場
舞鶴市民会館



◀感謝状授与
金村同窓会長



▶寄付目録贈呈
小西実行委員長

御挨拶



京都大学第一九代総長

岡本道雄

舞鶴町松陰三九番地の岡本道雄でございます。舞鶴中学校第五回卒業で、中学校ではブラスバンド部に所属、最初はタイコ、その次はトランペット、最後はクラリネットと何でもやりました。

四年前から私は足を痛め入院していましたとき、校歌碑の揮毫の依頼を受けました。本来、字が下手で自信もなかったのですが、入院中であつたので何とかかなと思ひお受けしました。それは、多田卓夫君が私の後輩で、舞中の第五回同窓会長で実に立派な青年であり、私は少年時代から大変かわいがつておりまして明倫・舞中・三高・京大と私と同じ道を歩きました。

彼の奥さんが、本日ここにも来ておられますが、書道の先生であつて教えてあげると言つてもらひ、手本を書いてもらつて一生懸命練習しました。しかし、なかなか上手にならないのでお断りしようと思つたのです。その時ひらめいたのが、下手なのが私なんだ、そのままを書けばいいのだと思ひ、三年余り入院していましたが退院してからも自宅や研究室で練習して奥さんの手本で書かせていただきました。

そんなことで、今日の百周年記念の喜びの会にこうして皆さんと一緒に参加でき本当にうれしいと思つています。しかし、私は一月二五日が誕生日で九四歳になります。私は、今は元気でそのうち亡くなります。最近も二ヶ月入院しております。二週間前に退院したところですが、一昨日百周年記念の会に出かけようと決心しました。その気持ちは、この石碑は私よりずっと長生きします。百年、二百年と今後もずっとある訳です。その碑の誕生の時、その碑の中へ私の魂を吹き込もうと思つたのです。よし百周年に行こうと一昨日決心し今日出席したわけです。

魂を吹き込むとはどういうことか。私は人生を三度生きると誓つております。その一度は、松陰のわらぶぎの家から出てきた一人の少年が、舞鶴中学に入り、京都の第三高等学校へ行った、この一途な少年の美しい魂が舞鶴にはあるのです。これが、私が第一回真剣に生きたひととき。その次は、皆さんの若い頃なのでお忘れかも知れませんが、三六年前前大学の大紛争があつたんです。これは、単に日本の全大学だけでなく、

全世界の大学が大荒れに荒れまして、教官も命からがらでその時の京大総長が私でございます。私は、姉四人で一人息子です。母も女、女ばかりの中で育つた大変臆病で気の弱い男でありました。その男が大紛争の大学の中に飛び込んだわけですが、それにはまず恐れないことが大事だと思つて何をしたかという、百歳と七ヶ月で死んだ母の遺骨をお守りの中に入れ、私はそれを持つてちつとも恐れないという覚悟をしました。これが第二に私が真面目に生きた事。第三は、私九〇歳になつてから足を痛め、三年前に入院しました。その間、大紛争は済んだと皆さん思われているでしょうが、今、日本国内の教育は乱れているでしょう。これは何も日本の教育だけではない。政治も経済もあらゆるものが乱れていることをお気づきでしょう。また、これは日本だけの事ではない。世界中が揺らいでいる。これには、小さな日本の原因ではなく、世界の原因があるはずである。そのことを私は哲学的に勉強しようと思ひ、入院中から張本人と言われたマルクーゼという哲学者からヘーゲル、フョイエルバツハ、マルクス、ハイデガー、ハイパーマス等を一生懸命勉強しました。そして、あの紛争が何を意味していたのか哲学的に一生懸命考えました。その結果、あの紛争は済んだのではない。皆様ご承知の様に、その後日本では内閣が代わる毎に、新しい教育改革審議会を作つて若者の教育を直そうとしているが、その効果が出ません。それはその原因が日本

世界的な原因があるからであります。今我々はしつかり世界的に考えなくてはいけません。これが今こそ哲学的に考えなくてはいけないということです。

その時、西舞鶴高校の百周年。明治四〇年に開校したころ日本の近代化の出發、この近代の文明が発達して大変便利でよくなつたが、しかし、これで人類が栄えるのかどうか。環境問題があるでしょう。原子爆弾もあります。あらゆる問題が人類の将来に迫つており、これでよいのかどうか、大問題であります。これは、実はヘーゲルが始めて、その後ニイチェがやつて、ハイデガーが研究したが解決していない大問題である。これについて私は、入院中から一生懸命勉強し、現在自宅でも今までの中で一番沢山本を読む生活をしております。

これが私の第三の生きがいです。第一は少年、第二は総長・母親の遺骨、第三は人類の将来。この事を胸にして、あの石碑の中に私の魂と息を吹き込みたいと思ひ一昨日三時頃に決心しまして今日こへ出席いたしました。

今朝は、皆様のご好意によりまして、その石碑の傍により私の魂と息を吹き込みました。私は、間もなく死にますが、あの石碑は、百年、二百年、三百年、西舞鶴高校が栄えるのと同じようにあります。更にうれしい事には、多田君が書いた校歌碑・尚志・敬人の碑が私の書いた校歌碑の前にあることです。このことは、百年経つても二百年経つても多田君を傍に連れておられるという感激の

場所でありました。本当に今日はありがとうございます。心からお祝い申し上げます。平成一九年一〇月一三日 午前九時から



100周年記念事業 「校歌碑」除幕式

- | | |
|------|----|
| 式次第 | 式辞 |
| 1 開式 | 挨拶 |
| 2 式辞 | 挨拶 |
| 3 挨拶 | 序 |
| 4 式辞 | 閉 |
| 5 挨拶 | |
| 6 閉 | |



校歌碑除幕式から

100周年記念祝賀会

祝賀会

日時 平成19年10月13日(土)
午後1時から

場所 舞鶴西総合会館
4階ホール

祝賀会次第

- 開会あいさつ
- 実行委員長あいさつ
- 来賓あいさつ
- 乾杯
- 歓談
- 閉会あいさつ

創立100周年記念祝賀会



▲小西実行委員長
あいさつ

喜びの
祝賀会
会場から



▲友情の
メダルチョコ

記念品



▲校章ホルダー



百周年を終えて



双鶴同窓会百周年実行委員会
実行委員長 小西 千春

私が百周年実行委員長に就任したのが、平成一五年の評議委員会、平成一五年一〇月二日、第一回実行委員会開催から式典当日平成一九年一〇月一三日(土)の約四年間努めさせて頂き、金村同窓会長、北野西舞高校長他舞女、舞中、西高からの実行委員、同窓会本部役員、関係教職員各位の絶大な協力のもと一致団結して完了することが出来まして、各関係諸氏に心から感謝申し上げます。次第であります。

一〇月一三日当日は、西高校歌碑の除幕式、市民会館における式典、西総合会館における祝賀会も天候にめぐまれて、盛会裡に終了することができまして、又関係の費用も各回が卒業三〇周年の同級会で頂いた寄付金やその他の積立等もあり、会員から特別寄付を頂くこともなく終了出来ましたことも大変有難いことでありました。

母校舞女、舞中、西高は、明治、大正、昭和、平成と百年にわたる先輩達が堂々と築いた輝かしい歴史と良き伝統を受け継ぎ、国内はもちろん世界各地で活躍されている皆さんの様子を見聞きするにつけて、舞女、舞中、西高の偉大さを痛感するとともに、同窓生であったことを誇りに



思っている次第であります。

当日は、西高校歌碑の除幕式、記念式典、祝賀会とも大先輩の元京大総長、臨教審会長等を務められた今回の記念事業の一つの校歌碑揮毫の舞中第五回卒、岡本道雄先生に御臨席をいただき誠に意義深いことでありました。

又当日はもつと多勢の皆さんに案内したかったのでありますが会場の都合もあり、在校生の一部と同窓会員の各支部代表や、各回代表にしか案内できなかったのは残念な事でありました。

母校が百周年の大きな節目を迎え、新たな飛躍の一步として更に新たな輝かしい歴史を刻まれて、益々発展されますことを心から願いました。ご協力を賜りました関係各位にあらためて重ねて厚く御礼申し上げます。

創立百周年を祝う一日



平成一九年一〇月一三日(土) 京都府立西舞鶴高等学校、双鶴同窓会創立百周年を祝う式典と祝賀会が挙行されました。

記念事業の校歌碑除幕式が校舎正面玄関で来賓各位の出席のもとにとりおこなわれ、感慨もひとしおです。

在校生も式典前に本校卒業生であり現在競輪界で活躍されている稲垣裕之(H・八卒) 選手の講演を予定していましたが、当日北京五輪代表選考会と重なり日本競輪選手会、八倉京都支部長が代役を務められました。

生徒諸君は、先輩諸氏が築いてこられた歴史と伝統を継承することの

◀在校生 体育館に集合

大切さと、この記念すべき日に立ち会えた喜びを、それぞれに受け止めていました。

百周年を祝うかのような晴天に恵まれ、舞鶴市民会館へと式典会場を移し招待された会員、学校教職員関係者、来賓に加え在校生代表の総数約六〇〇名で午前一一時三〇分、厳かに開式となりました。

西舞鶴高校ブラスバンド伴奏で国歌、校歌斉唱とつづき、北野校長の式辞では百年の歴史が紹介され、同窓会への謝辞が表されました。在校生には、教育者の責務として伝統の重みを受けとめ



◀壇上の生徒会長



◀式典会場内



▲バンド演奏



▶アトラクション
琴の演奏

継承するようにも諭されました。

同窓会を代表して金村会長はいさつの中で百周年記念事業の経過が報告され感謝の意を述べられました。

来賓各位の祝辞と続き、最後に生徒会長の喜びの言葉で式典は括られ閉式となりました。

式典閉式後、直ちに舞鶴西総合会館四階ホールへと会場を変えての祝賀会となりましたが、関係者の協力もあり移動は順調に進み、受付席案内等混乱もなく、午後一時開会となりました。

祝賀会は二五〇名の出席となりました。小西百周年記念事業実行委員会長のあいさつで開会となり、遠来より今日のために出席をされた岡本京都大学名誉教授が祝辞を述べられ田中東舞鶴高校同窓会長の乾杯発声で宴となりました。

100周年実行委員会

| | | |
|------------|-------|--------|
| 同窓会会長 | 金村九二夫 | 高校3 |
| 100周年実行委員長 | 小西千春 | 舞中19-3 |
| 副実行委員長 | 林田光弘 | 高校17 |
| 記念式典部会 部会長 | 南房雄 | 高校9 |
| | 土淵隆文 | 高校9 |
| | 市田修一 | 高校17 |
| 記念誌部会 部会長 | 藤岡由美 | 高校17 |
| | 岸本真澄 | 舞中19-2 |
| | 飯尾幸子 | 舞女32 |
| | 神田昭夫 | 舞中19-1 |
| | 岸本哲 | 舞中20 |
| | 上羽玉枝 | 舞女31 |
| | 谷口千枝子 | 舞女35 |
| | 楠文範 | 高校21 |
| 記念事業部 部会長 | 柿本徳栄 | 高校24 |
| | 山雄堯之 | 高校6 |
| 祝賀会部会 部会長 | 藤田伊佐雄 | 高校2 |
| 副部会長 | 森脇邦夫 | 高校11 |
| 副部会長 | 齊藤友幸 | 高校20 |
| | 三輪香苗 | 高校17 |
| | 村田恵子 | 高校11 |
| | 大谷隆三 | 高校13 |
| | 谷口五津子 | 高校15 |
| | 上山利彦 | 高校18 |
| | 神原義信 | 高校19 |
| | 小幡俊一 | 高校20 |
| | 木下良一 | 高校21 |
| 総務部会 部会長 | 大滝隆信 | 高校14 |
| | 志摩和彦 | 高校14 |
| | 田中實 | 高校14 |
| | 竹内宏和 | 高校15 |
| | 水島克己 | 高校15 |
| 顧問 元校長 | 寺田俊男 | 高校11 |
| 校長 | 北野茂 | 高校18 |
| 全日制副校長 | 井関康宏 | |
| 通信制副校長 | 奥野正宣 | |
| 事務長 | 竹村尚行 | 高校24 |



舞女部会
「美やびのほまれ…」



舞中部会
「愛宕の山の空高く…」



高校部会
「伊佐津川 さざめき流れ…」

同窓会は、やはり
校歌&応援歌A

祝賀会サポーター (総務部会)

| | | |
|------|-------|------|
| 受付 | 元木文美子 | 高校11 |
| | 富田利子 | 高校13 |
| | 山口博子 | 高校13 |
| | 小西剛 | 高校14 |
| | 福本照子 | 高校14 |
| | 大石啓子 | 高校14 |
| | 谷口信子 | 高校15 |
| 会場誘導 | 吉田茂樹 | 高校14 |
| | 市川五十一 | 高校14 |
| | 藤本金雄 | 高校14 |
| | 倉木昌一 | 高校14 |
| カメラ | 梅垣一成 | 高校14 |
| | 富永幸記 | 高校14 |
| | 塩見威雄 | 高校14 |
| | 嵯峨根八郎 | 高校14 |



岸本真澄氏他、資料集めに編集作業にと記念誌部会の皆様には長期間御苦労様でした。

百周年実行委員会
百年の歴史を収録

明治四〇年四月加佐郡立高等女学校開校、大正一一年京都府立舞鶴中学校開校から、以来百年の歴史と記録を収録した記念誌が発刊されました。著名はかつて校内にあった「致思堂」の扁額からつけられました。サイズはA4判、昭和三〇年代以降は写真もカラー写真となり、一一〇頁に及ぶ貴重な記録写真集です。

編集後記

長い人生でも、百周年記念特集号の編集作業に参画できましたことは、名誉なことでもあり嬉しく感謝をいたしております。

撮影写真は一〇〇枚程にもなっておりますが、全てを掲載するのは不可能ですが、一部を紹介し再度当日の出来事を中心に良き思い出になればと編集いたしました。

同窓会の会員、役員各位の高齢化も百年の歴史を経過しますとやむを得ないことなのですが高校部会の人員数が大半を占めるようになってきたことから、同窓会の若返り、役員構成の見直しが課題となっています。

編集委員

- 嵯峨根八郎
- 田中 實
- 三輪 香苗
- 大滝 隆信
- 藤岡 由美

